

宮崎市民公開セミナー

がん先進医療の可能性を求めて

～自分の力でがんと闘う 免疫細胞療法

日本人の死因のトップであるがんの治療法について理解を深める市民公開セミナー「がん先進医療の可能性を求めて」(医療法人社団混志会 患者の集い・モミの木共催)は、宮崎市の宮日会館で1月23日開催されました。手術、抗がん剤、放射線療法に次ぐ先進的治療法として注目を集める「免疫細胞療法」の現状や課題についての講演や、がん患者による特別講演がありました。会場には約250人が訪れ、講演者の話に熱心に耳を傾けていました。



医療法人隆徳会 鶴田病院 腫瘍外来部長 串間 美昭氏

くしま・よしあき 1987年広島大学医学部卒業後、宮崎大学医学部第一外科に入局。鹿児島市立病院、宮崎市郡医師会病院などで外科勤務を経て、1993年鶴田病院へ。2002年から免疫細胞療法を担当し、2006年より現職

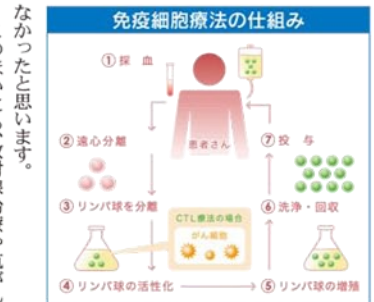
免疫細胞療法の有効的位置づけ

～当院での治療経験をもとに

副作用が少なく
他治療との併用可能

私が免疫細胞療法で患者さんの治療を始めてから今年で8年目になります。これまで約500人の患者さんの治療にあたってきました。初期のがんには手術が極めて有効ですが手術ができない症例もあります。また抗がん剤や放射線療法は、がん細胞だけでなく正常な細胞も殺傷されるため後遺症が残るなどの副作用があります。このようなリスクをいかに少なくしてがん治療の効果を上げるかが私たち医師の課題です。

「免疫細胞療法」とは、がん患者の血液からがんに対する免疫力の中心であるリンパ球を採取し体外で培養し、活性化・増殖させてから患者に投与する治療法です。自分の細胞を使うので副作用がほとんどなく、QOL(quality of life)生活の質)を維持しながらの治療が可能です。この療法をがん治療のどのタイミングで取り入れるかについて、これまでの症例を挙げながら説明します。私が免疫細胞療法を始めた年に、80代男性に再発した肝臓がんの治療をしました。高齢ということもあり積極的な治療は無理ということで、免疫細胞療法を単独で行ったのです。すると1回目の投与をした5日後に、腫瘍が小さくなっていったという事実が明らかになりました。今振り返ると、この症例がなければ私は免疫細胞療法を今日まで続けてい



なかつたと思います。このほかにも、放射線治療や抗がん剤による治療を優先し、その後に免疫細胞療法を併用し効果が認められた症例や、術後の再発防止目的で治療した症例があります。経過が良く再発していないケースや、進行をゆるやかに抑えることができたケースがあります。

さらなる有効性を追求 患者第一のサポートを

これまでの症例から言えることは、免疫細胞療法は単独で行うよりも、手術や放射線、抗がん剤による先行治療後、もしくは併用治療が有効であると考えています。他のがん治療で根治できず残存した微小ながんに対し、高度な細胞培養技術で活性化、増殖させた免疫細胞が有効的に作用する可能性があるため、再発予防にも適しているのではないかと思います。

免疫細胞療法は健康保険適用外なので治療費が自費診療ではありますが、免疫細胞療法に対しての正しい理解も拡がりつつある状況です。今後は免疫細胞療法をどのタイミングで取り入れるのが有効なのかをさらに分析し、方法を統一するのが課題です。また患者さんが自分らしい人生を描くために、私たち医療従事者は病気に対する知識だけでなく、人間性豊かなサポートをしていかなければならないと考えています。

健康な日常生活は社会的、経済的、精神的、身体的に安定している状態です。しかし、がんは罹患(りかん)してしまつたらどうでしょうか。痛みや併発する症状に耐えながら、家族への負担や経済的な負担などを考える時間が増えてしまうでしょう。がんは囚(とら)われていて、がんは囚(とら)われるようにコントロールするかが、がん治療の根幹ともいえる重要なポイントです。

がんに囚(とら)われている時間から解放されるためには「早期発見・早期治療」で完全治療するのが理想です。定期健診や自己への問いかけを日ごろから心掛けましょう。しかし、がんが進行し再発や転移も含め完全治療が困難な場合は、手術や放射線、抗がん剤で短期間のうちに寛解を目指し、がん囚(とら)われている時間の割合をいかに少なくしてその状態を維持するかが重要になります。

日常時間とがんに囚われている時間について

医療法人社団混志会 瀬田クリニック新横浜 院長

金子 亨氏

といった治療によって、がんに囚われている時間を少なくするのが医者としての役目です。またがん患者の方はその時間を、自分にとって意味のある時間に変える工夫をしてみることが大切です。インターネットなどで情報を集め治療の可能性を探る、同じ境遇の人の話を聞く、または自分の境遇を相手に伝える、旅行や趣味と治療を両立する、がん関連症状の緩和につながるケアセンターを利用するなど、さまざまな工夫ができます。自分ががんに囚われている時間をコントロールすることで、苦痛を減らし、明るい気持ちでがんと闘ってほしいと思います。



かねことある 1985年新潟大学医学部卒業後、新潟大学医学部産科婦人科学教室に入局。県立がんセンター1新横浜院、山形県鶴岡市三井病院副院長を経て、2002年より新横浜メディカルクリニック(現・瀬田クリニック)新横浜院院長

免疫細胞療法についての問い合わせ

医療法人隆徳会 鶴田病院
TEL0983-42-3711
(午前8時半～午後6時 日・祝日を除く)
西都市御舟町1丁目78番地
<http://www.ryutoku.or.jp/>

医療法人社団混志会 瀬田クリニック新横浜
TEL0570-088-472
(午前10時～午後5時 日・祝日を除く)
神奈川県横浜市港北区新横浜2-3-12
新横浜スクエアビル15階
<http://www.j-immunother.com/>